

II. 病害虫ミニ情報

水稻育苗中に発生する病害等の対策について

水稻の育苗中に発生する主な病害には、いもち病やばか苗病などの糸状菌(カビ)によるものと、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病の細菌によるものがあります。これらは病原菌に汚染された種子が主要な伝染源であり、種子消毒が有効です。この他、フザリウム菌やリゾプス菌などの糸状菌による苗立枯病は、土壌や育苗資材が主要な伝染源で、対策として病原菌のない用土や資材を用いることが重要です。また、緑化期までは鳥害(スズメなど)が問題となることもあります。

いずれも、被害程度によっては田植えに際して苗が不足することになります。いったん被害が生じてしまうと回復させることは困難なので、最大の対策は予防です。

対 策

1 種子消毒

- 1) 種子は、毎年更新します。通常の採種圃産種子は、農薬(モミガードC・DFおよびスミチオン乳剤)が籾表面に吹き付け処理されています。これを用いて浸種作業を行うと、農薬が水に溶け出して薬効が現れます。
- 2) 未消毒の種子を使用する場合には、化学農薬、生物農薬、温湯消毒のいずれかを選んで種子消毒を実施します。また、イネシンガレセンチュウも種子伝染するので、スミチオン乳剤等または温湯消毒で防除します。

2 育苗前の作業について

- 1) 前年使用した育苗箱は、よく洗浄し、ケミクロンGまたはイチバンで消毒します。
- 2) 育苗用土は、pH(H₂O)4.5~5.5の殺菌されたものを用います。自分で用土を用意する場合はpHを調整し、苗立枯病の対策として農薬を用土に処理します(処理方法は各農薬のラベルで確認してください)。農薬にはダコニール1000、タチガレエース液剤、バリダシン液剤5、ダコニール粉剤、タチガレエース粉剤などがあります(平成22年2月3日現在)。

※なお、農薬を処理する際には、他の作物を栽培する場所では行わないようにします。

- 3) 育苗ハウスの床は整地して平らにしておきます。床が平らでないと部分的に水が溜まり、そこが過湿となって病害が発生しやすくなります。

3 育苗中の管理について

※育苗中の極端な低温や高温は、病害の発生を助長します。育苗ハウス等の温度管理には十分注意します。

- 1) 出芽時の温度は28~30℃とし、必要以上に高めないようにします。出芽が悪いからといって温度を高めると、病害の発生を助長します。浸種時に適温でじっくり吸水させてから鳩胸状態まで催芽(芽出し)して播種することが大切です。
- 2) 緑化期(出芽揃い~本葉第1葉期)までは、昼間は20~25℃、夜間は15~20℃とします。
- 3) 硬化期は、昼間は20~25℃、夜間は10~15℃とします。
- 4) 緑化期、硬化期は加湿にならないように注意し、灌水量は、夕方には覆土の表面がやや乾く程度とします。

4 鳥害について

籾に胚乳が残っている間は、鳥害を受けるおそれがあります。スズメの場合、人家、電線、樹木近くで被害が大きいとされます。育苗ハウスの開口部に防鳥ネットを張って侵入を防止するのが確実な方法です。スズメでは、防鳥ネットの網目は、目合い20mmで実用上の問題はないものの時々通り抜けて進入する場合がありますが、目合い10mmなら確実に防げる、とされています。また、網と地面、網と網などの継ぎ目に隙間ができないようにしておかないと効果がありません。

茨城県病害虫防除所

病害虫発生予報3月号(平成22年)より抜粋